

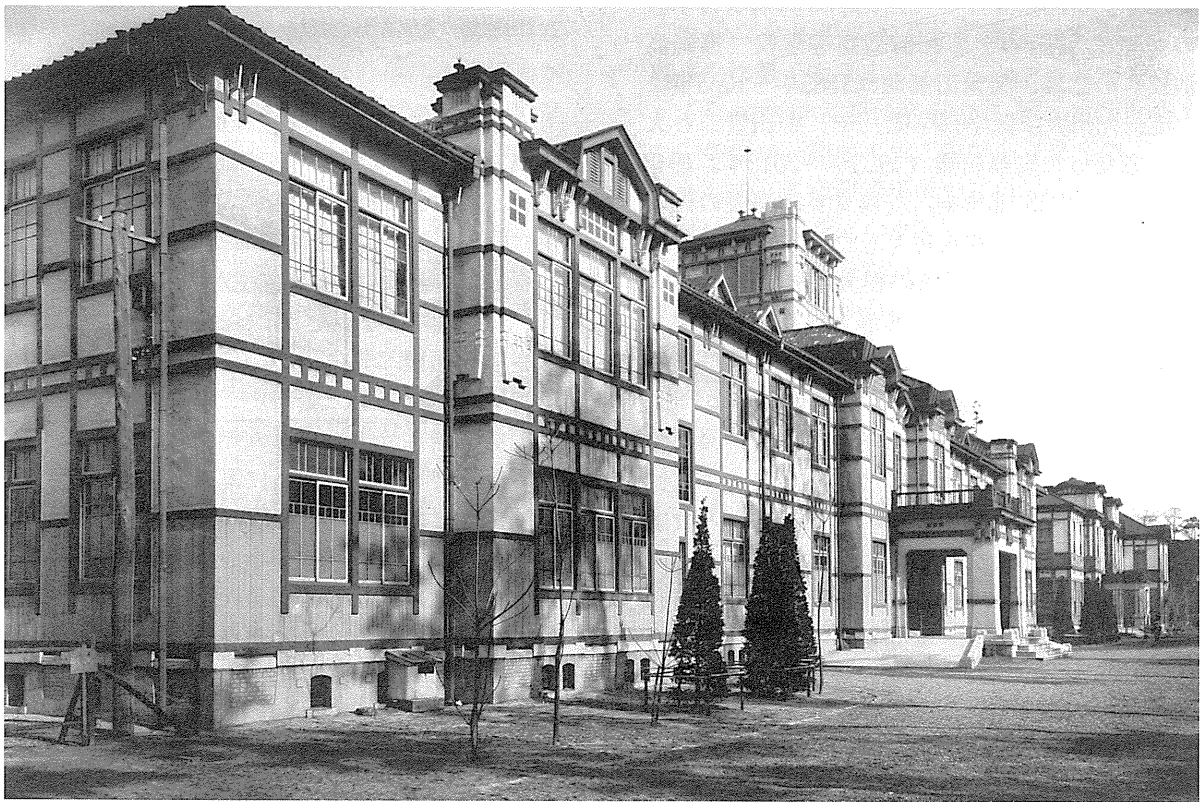
九州大学 大学文書館ニュース

第42号

2019. 3. 31

目 次

曾田豊二文庫の開設にあたって…………… 2	九州大学大学文書館委員会名簿…………… 7
福岡共同公文書館について…………… 5	九州大学大学文書館名簿…………… 7
	大学文書館日誌抄録…………… 8



「九州帝国大学医学部耳鼻咽喉科学教室」（1920年）

大正9（1920）年3月、医学部の正門を入って左手奥に耳鼻咽喉科学教室1018坪が竣工した。正面棟は2階建てで1階は右側が男子患者控室、左側が女子患者控室。男女別々の待合室は珍しいという。そのほか1階には実験室、診察室、看護婦室等が置かれ、2階には教授室を始めとする教官室、図書閲覧室等が、3階には宿直室、4階には物置があった。病室は本教室の背面に建てられた平屋に設置されていた（以上、『九州大学医学部建築史』2010年7月）。この教室を最初に主宰したのは、我が国のみならず世界の耳鼻咽喉科学界をリードした久保猪之吉である。久保教授の門からは20余名の教授や、多くの臨床家が輩出した。次頁以下にふれる曾田豊二の父、曾田恭助もその一人であり、久保らが発行した雑誌『エニグマ』の編集や、福岡市・北九州地域における文化活動の一翼を担い、また支援した人物としても著名である。

曾田豊二文庫の開設にあたって

安藤文英

[解説] 以下は2019（平成31）年1月14日、医療法人西福岡病院（福岡市西区生の松原）の隣接地に設立された「曾田豊二文庫」開設式典における安藤文英理事長（1975年、九州大学医学部卒業）の「ご挨拶」である。曾田文庫は九州大学医学部を卒業後、同大助教授を経て福岡大学医学部教授（耳鼻咽喉科学初代教授）に就任、福岡大学病院長等を務めた曾田豊二（1925年～2017年）の蔵書約3万冊のコレクションであるが、同文庫開館式典での「ご挨拶」には、曾田豊二の経歴や活動だけでなく、曾田が連なる九州大学耳鼻咽喉科学教室の歴史、曾田の学んだ旧制高等学校（福岡高等学校）の意義、父曾田恭助（1885年～1963年。1913年、九州大学医学部卒業）や、曾田豊二と大学で同窓だった安藤精彌（1923年～2012年。1948年、九州大学医学部卒業。安藤文英理事長の御尊父）との関係等、委曲を尽くした説明がなされている。のみならず、個人の膨大な蔵書（コレクション）をどのような形で整理・保存し、活用していくべきかについても、地域連携（社会貢献）のあり方を含めて、極めて具体的に示されている。このことはアーカイヴズ学や図書館情報学の実践例としても極めて貴重な試みであり、「ご挨拶」を「曾田豊二文庫の開設にあたって」と改題して、原文のまま九州大学大学文書館のニューズレターに所収させていただく所以である。最後に掲載をご快諾いただいた安藤文英先生をはじめ、曾田豊二文庫、曾田豊二記念財団等、関係各位に謝意を表し、文頭の「解説」に代えたい。

（大学文書館教授 折田悦郎）

ご挨拶

医療法人西福岡病院理事長の安藤文英でございます。一言、ご挨拶、そして文庫設立の経緯についてご説明いたします。本日、曾田豊二文庫開設にあたりささやかではありますが記念式典の開催をご案内いたしましたところ、お寒い中、連休でお休みの中にもかかわらずご出席いただきまして、まことにありがたく感謝申し上げます。

このお話が出て参りましたのは一昨年の秋であ



曾田豊二文庫開設式テープカット
右より安藤文英理事長、曾田キミヨ氏、白石君男曾田財団理事長

りまして、遅れに遅れを重ね足掛け3年、ようやく完成しましたが、寒い中の開設となってしまいました。奥様にはまことに申し訳ないこととなりました。実は昨日が曾田豊二先生の命日で三回忌です。温かい今日の晴天は恰も曾田先生が微笑んでおられる様で、良い日和となったとほっとしております。

さて曾田豊二先生の足跡につきましては配布させていただきました資料をご参照ください。先生は旧制福岡高等学校から九州帝国大学医学部にすすまれ、ご卒業の後直ちに耳鼻咽喉科学を専攻されております。福岡大学医学部教授、名誉教授、そして日本耳鼻科学会理事長といった大役に就かれ、日本耳鼻咽喉科学会の頂点に上り詰められました。70歳のとき、私の父精彌と英彦山で同郷、また大学医学部入学が昭和19年で同期との誼をもって父の要請をお受けになり私共の医療法人に理事としてご就任、20年以上ご尽力いただきました。当院の診療に随分力をいただきました。その一方で、福岡大学医学部を退任された同僚教授10名ほどを同志としてまとめられ、無料の医療相談所「福岡養生相談室」を開設・運営されております。天神ビルにありました私どものサテライトクリニックの一室で始められ、クリニック閉鎖の後には、かねてから知遇を得ておられた元読売新聞社記者、藤野博史さんのご仲介と、本日ご臨席の読売新聞西部本社代表取締役社長、中井一平様のご協力を得て、読売新聞西部本社ビルに所を変えて

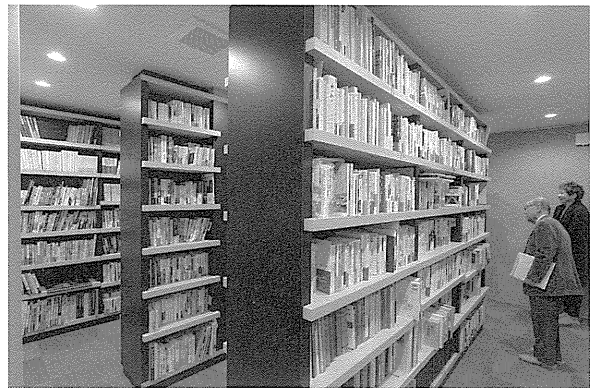
続けられ、約10年にわたります。これは、先生の晩年に至る社会的活動として特筆されるものであります。

私が先生にお目にかかったのは20年以上前であり、したがって約20年間にわたりその警咳に接することとなりました。悠揚迫らぬ態度、融通無碍の思考。懐の深い、とはあのような方を言うのでしょう。領域を異にする内科医師の私には、思想家として映りました。医学部時代の臨床講義は哲学の講義のようだった、と聞いたことがあります。

私事ですが、父が7年前に亡くなった後、理事としてのみならず何かと私を支えていただきました。先生が繰り返し言われたのが、「親父にも色々な書き物や遺品があるだろう。それらを、早いうちに「アーカイブ」としてきちんと残しておきなさい」でした。ご自身の事、その蔵書の行方も意識されていたのではないかと想像しております。

本日お持ち帰りいただくものの中に、曾田豊二先生のお弟子さんたちが取り纏められた追悼集がございます。中に私も記しましたが、ご逝去の2カ月ほど前（平成28年11月）に初めて赤坂のお宅に参上した折、膨大な蔵書の山を目撃することとなりました。「書物無き部屋は魂無き肉体の如し」と言った人がありますが、全部屋、将に汗牛充棟、床も傾く程でしたが、その領域の広さに圧倒されました。耳鼻科学を中心に医学書は勿論ですが、文学、哲学、歴史、小説、評論、自然科学全般、そして漫画、雑誌など世俗的な領域のものも含む多種多様な書物は、先生のあくなき知的好奇心、教養人としての嗜みか、いや教養人であればこそ、その果てしない奥深さを知り、本に求められたのではないかと。将に森羅万象がそこに在る、の感がいたしました。あるいは父上曾田恭助氏がそうであったように、文化的なサロンを再現されようとしたのか、蔵書数は推定3万冊に及びます。

初七日（平成29年1月）に赤坂のご自宅に数人で奥様キミヨ様を訪ねましたが、その席で、このことについて話が及びました際、奥様から「曾田豊二文庫」として保存したい旨お話がございました。これが全ての始まりとなりました。このとき奥様は赤坂の旧宅での保存を考えておられたように思いますが、諸般の事情から実現困難でありました。私自身も、まず難しいだろうな、くらいで、よもや私の病院でお引き受けするなど微塵も思っておりませんでした。一方で、奥様のご意向・ご賛同を受け曾田豊二先生のご遺産を基金と



曾田文庫の内部（読賣新聞社提供）

して、「曾田豊二記念財団」設立の話が定まりつつありました。10カ月ほどの真摯で濃密な話し合いと理事長白石君男先生、理事森園哲二先生や加藤寿彦先生のご配慮のもと、奥様から当法人に対しご寄付をいただけること、そして「曾田豊二記念財団」からのご支援もいただけることとなり、文庫設立を私の法人でお引き受けすることと相成った次第であります。

この役割は大変に名誉なことと受け止めました。これが一昨年の秋ごろでありまして、その頃私としましては保管場所のご提供くらいに比較的气楽にお引き受けしました。しかし、単に蔵書の保管だけではもったいない、社会的に意義のある施設にしようという夢が膨らみ、設立準備委員会を設けて協議することといたしました。なお、ご自宅の処分等により蔵書のみならず家財道具一式の扱いが課題となりましたが、セイワ地研次田和重会長のご好意により現在財団の所在地ともなっております赤坂コートビルのワンフロアをお借りすることが叶いまして、これが時間的な猶予をあたえてくれることと相成りました。

文庫設置については諸条件を鑑み、法人従業員宿舎として借りておりました病院隣接地の民家に白羽の矢を立て、作業に取り掛かることになりました。ここが第一種住宅専用地といった土地利用上の制限がある中、セイワ地研の皆様、森川工務店様などのご尽力を賜り、行政との調整を終え設計図を定め、昨年4月から改装にかかりました。ごく普通の小さな民家に膨大な量の重い書籍を保管するのですから補強も必要で、3カ月程で終わると思われた工事は思いのほか時間がかかり7カ月を要しました。完成後すぐにも仮置き場からの移設搬入をと思いましたが、書籍の状態があまり良いものではありませんで、その改良作業にはさらに時日を要しました。幸い文庫長をお願いし

ておりました田中公人氏による丁寧かつ慎重な作業をもって、よい状態での移設ができませんでした。

なお、曾田豊二先生の父上恭助氏も同じ耳鼻咽喉科の医師でありました。九州帝国大学医学部耳鼻咽喉科学教室の初代教授久保猪之吉氏の直弟子であられたことから、久保先生関連の大量の文書資料もございました。貴重なものも含まれておりましたから、特に、九州大学大学文書館折田悦郎教授のもとで整理、分析が行われることになり、現在ダンボール170箱分が文書館で保管されております。一部は大学文書館で永久保存されることとなりますが、その他の分の取り扱いは今後の検討課題となります。実は、更に200箱以上の書籍がまだ当院の倉庫に保管中であり、文庫での配架は全体の6割ほどに留まっております。容量の見積もりを誤った結果です。

趣旨というほどのものではない文庫設立の趣は以下の通りといたしております。

- 1、久保猪之吉、曾田恭助に連なる曾田豊二の求めた人文的探求の足跡
- 2、旧制高等学校と教養主義の時代体現
- 3、久保猪之吉を始祖とする我が国耳鼻科学の歴史
- 4、養生相談室の事跡
- 5、赤坂の旧宅の変遷
- 6、結核療養所文芸等々

なお3の久保猪之吉につきましてはつい先ごろ柴田浩一先生による渾身の著書『評伝耳鼻咽喉科のバイオニア久保猪之吉』(梓書院、2018年)が上梓されております。お持ちでない方には後ほど贈呈させていただきます。

曾田豊二文庫の標札ですが、その文字には生前曾田先生がご署名された文字をそのまま利用しております。文字を集める「集字」という手法があると大学文書館教授折田悦郎先生に教えていただき、白石先生に遺品の中から探していただいたもので、また旧曾田邸からは蔵書・文書のほか、樹木5本、赤レンガ、門柱2本、庭に配置されておりました石材を持ち運んでおまして、その再利用も行っております。真にささやかではありますが、再構築しておりますのでご覧ください。

さて、いま我国ではこのような個人所蔵書物の保存は困難であって、公共の図書館においても、寄せられる書物の保存要請を断られておられるようです。過去に設立されたいろいろな「文庫」「ライブラリー」もその存続が危ぶまれ、いつの間にか処分されるといった事態が出来、問題視さ

れております。実は、父上恭助氏も大変な蔵書家であり、優に3万冊はあったと聞き及びます。北九州市立図書館で「曾田文庫」として一時保管されていたようですが、散逸してしまったそうです。このように場所や経費の問題を解決するものとして「デジタルアーカイブ」なるものが考案され、時代はそのような方向に向かっていること、私は、それらのことをよく承知したうえでお引き受けいたしました。それは、大変お世話になりました曾田豊二先生へのせめてものご供養になるのではないかとの思い、また旧制高校出身であられる方々の生きざまに共感する者でありまして、追い求められた教養豊かな人生のその若き折の足跡を辿る縁として、やはり現物をもって展示しなければ真に理解するのは困難であろう、迫りくる圧倒的な質量を感じるだけでも意味のあることであると思うが故であります。

またこの文庫では、あえて図書館や本屋のようにはきちんと区分整理せず、曾田先生が生前身近に置いておられた状態を尊重して配架しております。そうすることが個人を偲ぶのに適当であり、またある本棚の前に佇みますとその周囲にはさまざまな領域の書物が視野に入ってきてきて、すぐに手に取ることができるといった効用があるものと考えます。

ある人が言っております。「本との偶然の出会い。あなたの必要な本は、あなたが見つけた物の横に在る。」と。曾田豊二先生が生涯を通して追い求められた知の旅をここに再現し、来館された方々が疑似体験できればと思います。今後の活動の方向性は、単に陳列しておくだけではなく、ここをプラットフォームとしての活用、例えば企画展示、インターネットを活用して情報発信等々、さまざまに利活用できるのではないかと、究極には何らかの成果物に至れば、との夢も膨らみますが、私どもにはその知恵や力量がありません。皆様方にはどうかご指導、ご援助を賜りたく、お願いを申し上げる次第です。

結びに、この文庫設立にあたり委員として準備にご参画いただきました方々を紹介いたします。森園哲夫、折田悦郎、白石君男、藤野博史、植木とみ子、田中公人各位であります。なお、先ほどの委員会をもって準備委員会は運営委員会として発展解消いたしました。引き続きその運営にご協力をいただきます。有難うございます。以上長くなりましたがご挨拶とさせていただきます。有難うございました。

(医療法人西福岡病院理事長)

福岡共同公文書館について

古賀 洋

はじめに

福岡共同公文書館は、福岡県と県内の政令市を除く全市町村58団体の共同で運営、利用する公文書館である。平成24年の11月に、国内で唯一の県と市町村の共同公文書館として開館したが、開館6年を経た現在でもこのような共同公文書館は当館だけである。

加えて、「福岡共同公文書館」の名称についても、実は組織としての名称ではない。当館は福岡県立公文書館と、福岡県自治振興組合（以下組合と称する）が設置する福岡県市町村公文書館とが、同じ建物の中で一体的に運営されている。市町村が一部事務組合で公文書館を共同運営している例もなければ、県と市町村の公文書館が同じ建物に同居している例も他にはない。そんな極めて珍しい公文書館が「福岡共同公文書館」（以下当館と称する）である。

組織形態と人員体制

当館は、組織としては2つの公文書館があることになっているが、訪問者から見た場合には、「ここは共同公文書館という一つの館なのだ」という印象しかないであろう。窓口カウンターも対応する職員も、そこに県と市町村という区別はない。

当館では、一般職員6名（県3、組合3）と非常勤職員9名の15名の職員が働いている。職員個々で見ると、それぞれ県の職員、組合の職員という身分があるが、県職員が組合管理者から、組合職員が県知事からそれぞれ併任辞令を受けることにより、全ての職員が県と市町村それぞれの公文書館の身分を持って一体的に業務にあたっている。二つの館は館長、副館長以下、総務企画班、文書班の2班体制も共通であり、役職者も含めた職員全員が2館を兼任しているので一体的な運営が可能となっている。実際の業務の中でも、例えば複写手数料の収納の際に文書の移管元が県か市町村かで領収書の様式と収納先が異なることなどを除けば、業務の上で県と市町村の区別を意識することは少ない。

施設の概要

当館は、筑紫野市上古賀の県有地に建設された。九州自動車道筑紫野インターから車で約5分、JR二日市駅からは徒歩13分と交通アクセスは良好である。公共施設の転用で整備される公文書館も多い中、当館は公文書館の専用施設として約23億円をかけて新築された。なお、この建設費は建物の共有部分も含めた面積割により、県と組合とで概ね2:3の割合で按分して負担している。

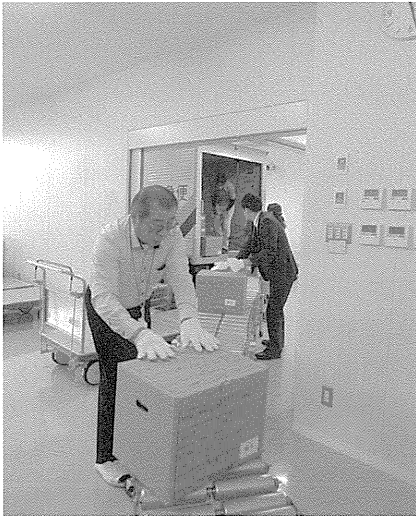
施設は鉄筋コンクリート3階建て（1部4階）、延床面積は5,421㎡であり、このうち文書保存庫は2,516㎡である。文書保存庫は7室あり、開館前に想定した搬入量から、収蔵量が県と市町村で概ね1:3の割合になるように部屋を県2室、市町村5室に分けている。そのほか、事務室、閲覧室、作業用のスペースのほか、一般への貸出もできる会議室と研修室を備えている。

当初から公文書館として設計された分、使い勝手はよい。搬入された公文書は仮登録されるまで搬入口から隣り合った部屋を移動していくようになっている。文書保存庫は、2階と3階に配置され、それぞれの室内にはワークスペースが確保されていて、職員が作業しやすい環境である。保存庫内の空調も、調湿機能、空気清浄機能等を確保し24時間運転を行っている。書架延長は26.4kmあり、約30年分の歴史公文書を収蔵できると見込んでいる。

建物自体も堅牢な構造であり、2階以上の外壁



福岡共同公文書館外観



移管文書の搬入作業

及び屋根は二重構造となっている。これにより屋内への雨水の侵入防止に万全を期すとともに、急激な室内温度の変化を防いでいる。また、敷地内に将来の増築スペースが確保されていて、文書保存庫を倍増させることにより、この場所で約60年分の公文書を受け入れていくことが見込まれている。

共同公文書館における文書管理

前述したように、当館は施設の上では公文書を保存する環境として申し分のないものであると自負している。問題は、他の多くの公文書館でも課題となっている「公文書館への文書の移管」である。その中でも、当館をあまり活用していない市町村があることが悩みの種となっている。

繰り返しになるが当館は「福岡県立公文書館」と「福岡県市町村公文書館」の2館の組織があり、市町村公文書館の方は一部事務組合である。つまり、県と一部事務組合との共同運営なのだが、そのことは市町村にとっては、文書を作成する担当課や文書を管理している課と、公文書館が別の地方公共団体であることを意味する。したがって、県の場合は組織内で文書を引き渡すのだが、市町村の場合は組織外へ文書の管理を移すことになる。組合と、構成団体の例規整備によってそれが可能となっているが、各市町村の職員が心理的な距離やハードルのようなものを感じていることは想像に難くない。加えて、それぞれの市町村ごとに文書管理の方法が異なっており、例えばひとつのファイルの形態も紐綴じや紙ファイル、個別フォルダーなど様々で、文書リストの様式もそれぞれの市町村で独自に作成されている。もち

ろん、文書管理規程等も県内の市町村で統一されている訳ではない。

こうした状況の中、市町村公文書の移管にあたっては、まずは移管元市町村による一次選別を経て、公文書館へ対象となる公文書を送ってもらうことになるのだが、市町村の現場では業務多忙あるいは選別に習熟していない等の理由により、なかなか移管が行われない自治体もある。そこで当館では、こうした市町村の要望も受けながら、平成28年度からは市町村の現場に赴いて現地での選別支援活動を積極的に行い、移管対象となる公文書の掘り起しと文書移管の促進に努めている。また、アーカイブ機関として、移管を受けるのみにではなく保存、整理を行うことで、移管元自治体が必要とする場合には直ちに閲覧や借覧に応じる体制を整えている。特に市町村に対しては、こうした公文書館の使い勝手の良さをアピールすることで、これからの行政活動にとって公文書館は必要かつ便利な存在であることを理解してもらえよう、努力していきたい。

普及啓発事業と利用の促進について

当館には、小規模ながらも展示室があり、年に2回、企画展を開催しているほか、常設展示も行っている。公文書館の展示活動については必ずしも本務ではないという声もあるが、当館の活動を公表し、また公文書を保存するアーカイブズとしての価値を一般の方にも理解してもらう絶好の機会であるという目的を持って行っている。一般向けに関心のあるテーマを選び、史料である公文書の見せ方をどうするのかといった苦労もあるが、当館の活動を知ってもらう重要な機会として、今後も工夫しながら取り組んでいくことにしている。

一方、利用者の請求による公文書の閲覧利用については、利用冊数は増加しているが件数としてはさほど多くはない。利用にあたっては、申請書が出された後に当該公文書の審査を行い、結果については15日以内に申請者に通知することになっている。しかし、1件当たりのボリュームが大きかったりして審査に要する時間が伸びる傾向にある。さらに審査の結果、一部利用となった公文書の閲覧は、複製物の作成とマスキングによる対応が基本となり、実際に利用者が閲覧できるまでに、かなりの時間をいただいている状況である。一度審査されたものは簡易閲覧として、前回利用者と同様の対応であれば審査を経ずすぐに閲覧し

ていただけるようにしているが、当館ではまだ要
審査となっている公文書が多く、また受け入れ時
に審査を済ませて配架するような余裕もないた
め、当面はこのような対応が続くと思われる。

これからの共同公文書館とは

冒頭に述べたように、「共同公文書館」という
形はまだ国内では稀有な存在である。共同である
が故の課題もあり、悩みもある。ただ、誇れるこ
とは当館があることによって、福岡県では県を含
む全ての自治体が公文書館を持っている設置率

100%の県となっていることである。全国の自治
体、特に市町村においては単独で公文書館を設置
することは予算や人員配置といった制約からも容
易ではなく、現に福岡県を除くと全国の市町村で
公文書館を設置しているのは2%程しかない。こ
れから自治体アーカイブズが普及していくため
には、当館の存在がひとつの答えとなることが求
められている、と思っている。

(福岡共同公文書館(福岡県立公文書館・
福岡県市町村公文書館)副館長)

九州大学大学文書館委員会名簿

委員長		副学長	宮本 一夫	委員	農 院	准教授	高橋 義文
委員	文 書 館	教 授	折田 悦郎	〃	芸 工 院	准教授	Remijn Gerard
〃	〃	准教授	藤岡健太郎	〃	生 防 研	教 授	馬場 義裕
〃	人 文 院	教 授	佐伯 弘次	〃	基 幹	教 授	福田 千鶴
〃	比 文 院	教 授	中野 等	〃	先 導 研	教 授	永島 英夫
〃	法 院	教 授	熊野 直樹	〃	生 物 環 境	教 授	吉田 敏
〃	博 物 館	准教授	三島美佐子	〃	博 物 館	館 長	緒方 一夫
〃	韓 七	教 授	永島 広紀	〃	総 務 部	部 長	新津 勝二
〃	情 基 七	教 授	廣川佐千男	〃	理 学 部 等	事 務 長	黒岩 由美
〃	総務部総務課	課 長	田村 哲之	〃	図 書 館	事 務 部 長	渡邊 俊彦
〃	経 院	准教授	鷺崎俊太郎				

(2019年1月1日現在)

九州大学大学文書館名簿

館 長		副学長	宮本 一夫	協力研究員	東京大学教養学部准教授	山口 輝臣
副館長	文 書 館	教 授	折田 悦郎	〃	医学歴史館学芸員	赤司 友徳
専任教員	〃	准教授	藤岡健太郎	〃	北九州市総務局総務部総務課	市原 猛志
兼任教員	人 文 院	教 授	佐伯 弘次	〃	清水建設株式会社 技術研究所	松本 隆史
〃	比 文 院	教 授	中野 等	総務課長		田村 哲之
〃	法 院	教 授	熊野 直樹	事務職員		木下 博貴
〃	博 物 館	准教授	三島美佐子	事務補佐員		川畑 由美
〃	韓 七	教 授	永島 広紀	〃		中村 江里
〃	情 基 七	教 授	廣川佐千男	〃		西川 英治
協力研究員	九州大学名誉教授		東定 宣昌	〃		木田 貴大
〃	長崎大学名誉教授		柴多 一雄	〃		江頭 実生
〃	九州大学名誉教授		柴田 篤	〃		瓜生 敏子
〃	福岡市博物館館長		有馬 學	〃		林 隆生
〃	西日本新聞社		大西 直人			
〃	西南女学院大学教授		新谷 恭明			

(2019年1月1日現在)

大学文書館日誌抄録 (2018年1月～2019年2月)

- 1.5 (金) KBC九州朝日放送より電話取材(米軍機墜落の件)。福岡県人権研究所より資料調査のため来館。折田悦郎教授、NHK福岡放送局「ロクいち!福岡 九大箱崎キャンパス解体校舎の記録を残す」に出演・コメント。
- 1.12 (金) アジア歴史資料センターより資料調査のため来館。
- 1.15 (月) 折田教授、NHK福岡放送局「ロクいち!福岡 九大米軍機墜落50年風化防ぐ取り組み」に出演・コメント。
- 1.17 (水) 柴田篤名誉教授より資料寄贈(29日、3月15日、29日、4月13日、26日、5月7日、10日、14日も同様)。かぼちゃ堂(古書店)より資料寄贈。
- 1.18 (木) 大学院システム生命科学府事務室より資料寄贈。
- 1.19 (金) NHK福岡放送局より取材のため来館(九大学生運動の件。2月27日、3月9日も同様)。
- 1.22 (月) 元九大生協職員、資料調査のため来館(2月5日、7日、14日、19日、26日、3月12日、15日、20日、26日、27日、4月19日、23日、24日、5月7日、14日、17日、21日、28日、6月4日、6日、11日、13日、18日、7月2日、4日、9日、11日、13日、17日、19日、8月10日、9月10日、13日、19日、20日、27日、10月1日、2日、5日、9日、11日、16日、17日、18日、22日、23日、25日、29日、30日、31日、11月1日、5日、6日、9日、12日、13日、15日、16日、19日、20日、21日、22日、26日、27日、28日、30日、12月3日、4日、6日、7日、10日、11日、12日、13日、14日、21日、26日、2019年1月7日、8日、10日、11日も同様)。
- 1.24 (水) 国際部国際企画課より資料移管。
- 1.26 (金) 朝日新聞社記者、取材のため来館(九大学生運動の件)。西日本新聞社記者、取材のため来館(九大の歴史の件。5月11日も同様)。
- 1.29 (月) 長崎女子短期大学より資料調査のため来館(2月13日、5月2日、14日、6月25日、7月2日、9月7日、12月3日、21日も同様)。芸術工学50周年記念事業のため、芸術工学部教務課へ資料貸し出し。
- 1.30 (火) 総務部総務課より資料移管。福岡女学院大学学院資料室より資料調査のため来館(2月20日、4月11日、5月10日も同様)。九州近現代研究会(於大学文書館、2月7日、27日、3月15日、27日、4月19日、24日、5月7日、6月4日、7月26日も同様)。
- 2.5 (月) 福岡県立大学名誉教授、資料調査のため来館(3月27日も同様)。
- 2.7 (水) 福島淳福岡教育大学名誉教授より資料寄贈。
- 2.13 (火) KBC九州朝日放送より取材のため来館(九大学生運動の件)。
- 2.14 (水) 折田教授、九州朝日放送「KBC ニュースピア 軍用機墜落過去福岡にも」に出演、コメント。
- 2.16 (金) 北九州市総務局総務部総務課より資料調査のため来館(3月12日、23日、4月6日、13日も同様)。
- 2.19 (月) 大学院人文科学研究院名誉教授、資料調査のため来館(3月9日、5月31日、6月4日、7日、15日、18日、19日、26日、29日、7月2日、4日、9日、17日、8月10日、9月21日、25日、28日、10月3日、12日、18日、30日、11月7日、12日、16日、26日、27日、12月6日、18日、19日、25日、26日、27日、2019年1月4日、17日も同様)。
- 2.22 (木) 韓国研究センターより資料調査のため来館(3月12日、19日、26日も同様)。
- 3.1 (木) 九州大学教職員組合より資料寄贈(7月10日、30日、8月3日も同様)。
- 3.5 (月) 北海道大学大学院工学研究院助教、資料調査のため来館(6日、27日も同様)。

- 3.5 (月) 九州大学「プロGRESS100」ワークショップ2018「旧外地演習林研究の地平」を韓国研究センター・農学部附属演習林と共催、藤岡准教授「各大学・機関に残る旧外地演習林関係資料の概況」を報告、折田教授コーディネーター（於西新プラザ）。
- 3.14 (水) 企画部企画課、監査室、学術研究・産学官連携本部、工学部等事務部、地球社会統合科学府、人事企画部人事企画課より資料移管。
- 3.19 (月) 九大フィルハーモニー・オーケストラより資料寄贈。
九大フィルハーモニー・オーケストラより資料整理のため来館（26日、6月18日、7月13日、11月27日、28日も同様）。
- 3.20 (火) 附属図書館事務部より資料移管。
学務部学務企画課より資料調査のため来館（5月8日も同様）。
- 3.22 (木) 折田教授、第2回福岡大学博物館フォーラム 大学資料を考えるにて「大学資料と大学アーカイブズ—九州大学大学文書館を例として—」を報告（於福岡大学文系センター棟）。
- 3.26 (月) 早稲田大学大学史資料センターより資料調査のため来館。
- 3.28 (水) 福岡県公文書館等連絡会議開催（折田副館長出席。於福岡市総合図書館）。
- 3.29 (木) 韓国延世大学校医科大学医史学科教授、資料調査のため来館。
- 3.30 (金) 岡本正子氏事務職員退任。
徳安祐子氏事務補佐員退任。
- 3.31 (土) 奥田八二日記研究会開催（於大学文書館。6月23日、8月31日、10月27日、12月1日、2019年2月23日も同様）。『九州大学大学史料叢書』第24輯刊行。
『九州大学大学文書館ニュース』第41号刊行。
『奥田八二日記研究会会報』第1号発行。
- 4.1 (日) 諸岡静児氏事務職員就任。
大学文書館協力委研究員を委嘱。
新谷恭明西南女学院大学教授
山口輝臣東京大学教養学部准教授
- 赤司友徳医学歴史館学芸員
松本隆史（清水建設株式会社技術研究所）
法学研究院、附属図書館付設記録資料館より資料調査のため来館（18日、24日、5月2日、16日、23日、30日、6月5日、7月4日も同様）。
- 4.3 (火) 清水建設株式会社技術研究所より資料調査のため来館（8月10日も同様）。
地球社会統合科学府等事務部より資料移管。
- 4.4 (水) 東京藝術大学音楽学部大学史資料室より大学文書館視察のため来館。
- 4.6 (金) 「平成29年度に保存期間が満了した法人文書の大学文書館への移管について（依頼）」（九大総三第1号）（法人文書資料室長→文書管理者）を發出。
- 4.9 (月) 木村京子氏（文学部卒業生）より資料寄贈（20日、6月27日も同様）。
- 4.10 (火) 「文書記録活動論」（大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻）開講（折田教授）。
- 4.11 (水) 「大学とは何かⅠ」（基幹教育総合科目）開講（折田教授）。
- 4.12 (木) 医系学部等事務部学務課より資料調査のため来館（13日、16日、17日も同様）。
小川滋名誉教授へ九大学生運動についての聞き取り調査（於大学文書館）。
附属図書館より資料移管（8月23日も同様）。
- 4.17 (火) 塩川郁夫氏（元医学部附属病院技官）来館、資料寄贈（24日、5月8日も同様）。
中尾哲夫氏より資料寄贈（8月21日も同様）。
- 4.18 (水) 九州大学SD（新採用職員研修）の一環として、折田教授「九大の歴史に触れる」を講義（於伊都キャンパスI²CNERホール）。
東北学院大学経営学部より資料調査のため来館。
- 4.26 (木) 第32回文書館委員会開催。
- 4.27 (金) 西日本文化協会より大学文書館視察のため来館。

- 5.7 (月) 統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻一行、大学文書館見学のため来館。
- 5.9 (水) 韓国研究センターより資料移管。
- 5.10 (木) 人文科学研究院後小路雅弘教授より資料寄贈(8月9日も同様)。
- 5.11 (金) 読売新聞西部本社記者、取材のため来館(米軍機墜落の件、16日も同様)。
- 5.15 (火) 農学研究院吉田茂二郎教授より資料寄贈(5月18日、7月26日、10月12日も同様)。
- 5.19 (土) シンポジウム「Furniture for Future使いながら守る・つなげる新たな仕組みとしかけの提案にむけて」を総合研究博物館と共催、折田教授「歴史的価値と意義を担保する大学公文書と文書館の役割」を報告(於旧工学部本館)。
- 5.21 (月) 芝浦工業大学システム理工学部教授、資料調査のため来館。FBS福岡放送より取材のため来館(米軍機墜落の件。22日、6月1日も同様)。
- 5.23 (水) 折田教授、「九州市民大学」で「九州大学箱崎キャンパスの歴史」を講演(於旧工学部本館、6月6日も同様)。
- 5.25 (金) 医学部第一内科同門会より資料寄贈。毎日新聞社記者、取材のため来館(米軍機墜落の件、6月25日も同様)。
- 5.28 (月) 農学部百年史編集委員、資料調査のため来館。2018年度第5回大学院統合新領域学府最先端セミナー開催、折田教授「九州大学の歴史と箱崎キャンパス」を講義(於箱崎キャンパス旧工学部5号館)。
- 5.30 (水) 医系学部等事務部財務課より資料移管。西日本新聞社より電話取材(米軍機墜落の件)。毎日新聞社より電話取材(米軍機墜落の件)。KBC九州朝日放送より電話取材(米軍機墜落の件)。
- 5.31 (木) 文系合同図書室より資料移管(6月12日、8月10日、23日、29日も同様)。
- 6.1 (金) 折田教授、FBS福岡放送 めんたいPlus「九大・箱崎キャンパス ファントム機墜落から50年「当事者」の証言とは」に出演・コメント。
- 6.7 (木) 朝日新聞社記者、取材のため来館(米軍機墜落の件)。
- 6.7 (木) 平成30年度全国公文書館長会議開催、藤岡健太郎准教授出席(於東京都ベルサール飯田橋ファースト)。
- 6.11 (月) 農学部同窓会より資料寄贈。
- 6.12 (火) NHK福岡放送局より取材のため来館(米軍機墜落の件)。
- 6.13 (水) 「大学とは何かⅡ」(基幹教育総合科目)開講(藤岡准教授)。
- 6.14 (木) 東北大学史料館准教授、資料調査のため来館(15日、10月2日、2019年1月17日も同様)。
- 6.19 (火) 新任係長・専門職員級研修の一環として、折田教授「九大の歴史について」を講義(於伊都キャンパスゲストハウス)。
- 6.26 (火) 第33回大学文書館委員会開催(書面回議)。
- 6.28 (木) 熱帯農学研究センターより資料寄贈。
- 6.30 (土) 九州大学女子卒業生の会・松の実会主催、大学文書館協力「箱崎キャンパス見学ツアー」開催(折田教授解説・案内)。
- 7.4 (水) 農学研究院長室より資料移管。
- 7.5 (木) 施設部施設企画課より資料調査のため来館。
- 7.6 (金) 松の実会より資料寄贈。
- 7.11 (水) 学務部学務企画、学務部学生支援課、学務部基幹教育課より資料移管。ジョンズ・ホプキンス大学より資料調査のため来館。
- 7.12 (木) 総務部環境安全管理課より資料移管。
- 7.13 (金) 学務部学生支援課より資料移管。福岡県公文書館等連絡会議開催、藤岡准教授出席(於太宰府市公文書館)。
- 7.18 (水) 福岡市鳥飼公民館長より六本松キャンパス関係資料について照会、回答。
- 7.20 (金) 農学部事務部より資料移管。
- 7.22 (日) 東京藝術大学シンポジウム「戦没学生のメッセージⅡ 今「学徒出陣」

- をどうとらえるか」開催、折田教授「学徒出陣をいま問うことの意味—九州大学を事例として—」を報告。
- 7.26 (木) 総務部総務課、財務部経理課、学務部より資料移管。
- 8.1 (水) 応用力学研究所より資料寄贈。
- 8.2 (木) 医学研究院より資料調査のため来館。
- 8.10 (金) 伊藤昌司名誉教授より資料寄贈。有吉英一氏より資料寄贈。
- 8.17 (金) 学務部より資料移管（9月6日、27日も同様）。
- 8.20 (月) 中央大学総合政策学部より資料調査のため来館。
- 8.22 (水) 中央図書館より資料移管（23日、27日も同様）。
- 8.27 (月) 学務部企画課、医学図書館より資料移管。
奈良女子大学より大学文書館視察のため来館。
- 8.28 (火) 吉村徳重名誉教授より資料寄贈。
- 8.29 (水) 統合移転推進部資産活用課より資料移管（9月10日、12日も同様）。
- 9.3 (月) 台湾中央研究院台湾史研究所より資料調査のため来館（4日も同様）。
- 9.5 (水) 総務部広報室より資料移管（10月24日も同様）。
NHK福岡放送局より資料利用について照会、回答。
- 9.6 (木) 貝塚地区事務部総務課より資料移管（20日も同様）。
- 9.13 (木) 学務部入試課より資料移管。
- 9.25 (火) 医系学部等事務部総務課、学務課、学術協力課、学務部学生支援課より文書移管。
- 9.25 (火) 総合研究博物館・大学文書館主催「伊都につながる百年展 ありがとう箱崎キャンパス—学術遺産と学者たち—」開催（於伊都キャンパス椎木講堂、～2019年1月18日）。
NHK福岡放送局より取材のため来館（学徒出陣・防空偽装の件）。
- 9.27 (木) 研究・産学官連携推進部産学官連携推進課より資料移管。
留学生会館より資料移管（10月2日、19日も同様）。
- 9.28 (金) 大学院人間環境学府より資料移管。
- 9.30 (日) 諸岡静児氏事務職員退任。
- 10.1 (月) 木下博貴氏、事務職員就任。
林隆生氏、事務補佐員就任。
- 10.3 (水) 国立近代建築資料館へ「明治期における官立高等教育施設の群像 旧制の専門学校、大学、高等学校などの実像を建築資料からさぐる」のため資料貸し出し。
- 10.10 (水) 「九州大学の歴史Ⅰ」（基幹教育総合科目）開講（折田教授）。
全国大学史資料協議会2018年度総会開催、折田教授「大学史資料と大学アーカイブズ—九大大学文書館の課題と展望—」を報告（於医学部百年講堂、～12日）。
- 10.11 (木) 市橋秀夫埼玉大学教養学部教授より資料寄贈。
- 10.12 (金) 「文書記録サービス論」（大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻）開講（藤岡准教授）。
- 10.15 (月) 中楯潔氏（経済学部卒業生）より資料寄贈。
- 10.17 (水) 芸術工学部事務部総務課より資料移管。
- 10.18 (木) 自治体向けワークショップ「公文書管理法時代における地方自治体のとるべき施策—公文書管理の具体的課題解決に向けて—」を、統合新領域学府主催、大学文書館共催で開催（於福岡共同公文書館）。
- 10.23 (火) 福岡共同公文書館より資料調査のため来館。
- 10.24 (水) 工学部等事務部より資料移管。
総務部同窓生基金課より資料移管。
- 10.31 (水) 佐藤匡央農学研究院教授より資料寄贈。
- 11.5 (月) 総務部総務課総務第二係より大学文書館視察のため来館。
- 11.9 (金) 情報システム部情報企画課、情報基盤課より資料移管。
- 11.14 (水) 研究・産学官連携推進部研究推進課より資料調査のため来館（15日も同様）。
- 11.21 (水) 福岡県公文書館等連絡会議開催、藤岡准教授出席（於福岡共同公文書館）。
- 11.27 (火) 箱崎九大記憶保存会より大学文書館見学のため来館。

- 11.30 (金) 九州大学病院別府病院より資料調査のため来館。
「九州大学の歴史Ⅱ」(基幹教育総合科目)開講(藤岡准教授)。
- 12.6 (木) RKB毎日放送より取材のため来館(米軍機墜落の件)。
- 12.7 (金) 黒木彬文氏(法学部卒業生)より資料寄贈。
- 12.11 (火) 村井哲郎氏(工学部卒業生)より資料寄贈。
- 12.14 (金) 東京大学文書館より大学文書館視察のため来館。
- 12.15 (土) 「ALIRG Workshop 2018」開催、折田教授開会の挨拶(於伊都キャンパスイースト1号館)。
- 12.19 (水) 田川市教育委員会文化生涯学習課文化係より資料調査のため来館。
- 12.21 (金) 慶應義塾大学大学院社会学研究科より大学文書館視察のため来館。
- 12.27 (木) 『九州大学大学文書館所蔵 横山晃一郎氏旧蔵東ドイツ文献目録』刊行。
- 1.15 (火) 折田教授、NHK福岡放送局「九大箱崎キャンパス航空工学教室“戦前戦後の歴史刻む”解体始まる」に出演・コメント。
- 1.19 (土) 早稲田大学理工学術院教授、名古屋大学名誉教授、大学文書館視察のため来館。
- 1.23 (水) 工学部機械航空学科より資料寄贈。
- 1.30 (水) シンポジウム「オープンデータと大学」を大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻、附属図書館、大学院人文科学研究院と共催。
- 1.31 (木) 台湾中央研究院中国文哲研究所より資料調査のため来館。
- 2.6 (水) 情報システム部情報企画課より資料移管。
江崎典宏事務局長、小代哲也企画部長一行、大学文書館視察のため来館
- 2.7 (木) 放送大学附属図書館長、オンライン教育センター長、大学文書館視察のため来館。
- 2.8 (金) 九州大学箱崎キャンパス閉校企画「ありがとう箱崎」展開催(於箱崎キャンパス保存地区旧工学部本館、旧本部第一庁舎、～10日)。
- 2.9 (土) Progress100国際シンポジウム2019「アジアから見た《大学演習林》—その来し方と行く末—」を韓国研究センター・農学部附属演習林と共催、藤岡准教授「大学史アーカイブズと大学演習林」を報告、折田教授ファシリテーター(於福岡演習林本部)。
- 2.10 (日) 「資料と公共性」研究会開催(折田教授解説・案内。於大学文書館)。

九州大学大学文書館ニュース 第42号

発行日 2019年3月31日

編集行
発行 九州大学大学文書館

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

Tel:092-642-2292 Fax:092-642-7646

Kyushu University Archives

印刷 株式会社ミドリ印刷